

ピアノ五重奏	第 6 番	ボッケリーニ
ピアノ五重奏		サン・サーンス
ピアノ五重奏		ドホナーニ

四季のコンサート 夏

[illegible]

桐五重奏団・ピアノクインテットの夕

ピ ア ノ 五 重 奏 曲

本日は、3曲のピアノ五重奏曲が演奏される。これらは室内楽と呼ばれるジャンルに属する。室内楽とは、普通2人から9人くらいまでの少人数で演奏されるものであり、各パートには奏者がそれぞれ1人ずつしかいない。そして各パートの間には作品全体を通じての主従の関係はない。室内楽では、このような構成上の特徴があるため、響きが透明で、各パートの織りなす旋律線がはっきりと聴こえてくる。重奏の音楽的な特徴は、独奏や合奏の場合とは基本的に異なっているのである。

ピアノ五重奏曲の中で最も有名な作品は、シューベルトの「罇」であろう。しかしそれは、ピアノ、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバスという異色の編成によるものである。ピアノ五重奏曲の最も典型的な編成は、ピアノと弦楽四重奏（第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ）の組み合わせである。弦楽四重奏に、ピアノのパートが加えられることにより、各弦楽器の動きに余裕が出てくるので、音楽的な遊びが自由にできるようになる。また、弦楽器とピアノとの対照的な響きの違いによって、弦楽器だけの重奏にはないダイナミックな力強さ、華やかな色彩感覚、変化に富んだ豊かな表現力などが生まれてくる。ベートーヴェン以前では弦楽五重奏曲の方が多かったが、ロマン派になると、このような特徴が好まれるようになり、ピアノ五重奏曲も愛用されるようになる。こうしてシューマン、ブラームス、ドヴォルジャーク、フォーレなどの数多くのピアノ五重奏曲の傑作が生まれることになったのである。

ピアノ五重奏曲の歴史上、初期の重要な作品が今夕のプログラムにあるボッケリーニ（1743～1805）の「ピアノ五重奏曲 第六番 ハ長調 作品57 遺作」である。この曲は、1799年にパリで出版された6曲のピアノ五重奏曲の中に含まれているものである。イタリアの作曲家ボッケリーニは、チェロ奏者としてもイタリアをはじめヨーロッパ各地で活躍した。チェロを巧みに用いた弦楽五重奏曲をはじめ、気品にあふれた室内楽曲を数多く書いたが、さらに交響曲や協奏曲などのジャンルにも質の高い作品を残し、古典派の中でも重要な作曲家の一人とされている。今夕演奏される「ピアノ五重奏曲」は、そうしたボッケリーニ特有の叙情性と洗練された優雅さをただよわせた作品である。

サン＝サーンス（1835～1921）は、フランス近代音楽の基礎を築いた作曲家であるが、ピアニスト、オルガニスト、教育者でもあり、さらに文学、哲学、天文学などにも優れた才能を示し、極めて多才な人であった。三重奏曲以上の室内楽曲を12曲も残しており、ロマン派の作曲家の中では、他のジャンルに劣らず、室内楽においてもかなりの多作家であったといえることができる。5つの楽器の扱い方が実に巧みな「ピアノ五重奏曲イ短調 作品14」は、1855年に作曲された。楽曲構成の仕方においては基本的には古典的な伝統に従っているが、第1楽章の主題を終楽章（第4楽章）において再び用いているところなどに新しい感覚がうかがえる。それはロマン派で好まれるようになった循環形式を応用したものである。

ドホナーニ（1877～1960）は、ハンガリー生まれの作曲家である。指揮者としても世界的な名声を得たが、さらにハンガリー人としてリスト以来の優れたピアニストと賞賛されるほどの人でもあった。第二次世界大戦後は故国を去ってアメリカに渡り、フロリダ州立大学のピアノと作曲の教授となり、ニューヨークで亡くなった。流麗な作風の「ピアノ五重奏曲 第二番 変ホ短調 作品25」は、1914年に作曲された。彼は室内楽の演奏も得意とするピアニストであったが、この作品にもそうした演奏家としての彼の特徴がよく現れている。彼は後期ロマン派の影響を強く受けたと言われているが、この作品でも特にブラームスの影響が感じられる。20世紀になってから作曲された「ピアノ五重奏曲」の中では極めて高い評価を得ている作品である。